

令和二年度寄附刀剣

西垣 江利子

令和二年一〇月に、岡山県ゆかりの愛刀家より刀剣資料十二口（刀四口、脇指四口、短刀四口）を岡山県立博物館にご寄贈いただいた。今回紹介する資料の内訳は、次表のとおりである。

No.	種類	名称	時代
1	短刀	国広	江戸時代初期
2	脇指	越後守藤原国備	江戸時代初期
3	脇指	河内守藤原国助	江戸時代初期
4	刀	正真	室町時代後期
5	刀	康継	江戸時代初期

制作時代は、室町時代後期～江戸時代初期のものである。

新刀の祖とも称され、後代の刀工にも大きな影響を与えた名工堀川国広の短刀や、国広の門人であった国備および国助の脇指、徳川家の御用鍛冶であった康継による南蛮鉄を用いた刀、

室町時代後期の千子派と思われる正真の刀など、いずれも日本の歴史において貴重な作といえる。

本稿では、各資料について概要を報告し、岡山県立博物館リニューアルオープン後の展示公開に備える。

《参考文献》

- 飯村嘉章『新刀大鑑 卷之一』刀剣美術工芸社 一九七六年
 飯村嘉章『有銘古刀大鑑』刀剣美術工芸社 一九八二年
 佐藤貫一『康継大鑑』財団法人日本美術刀剣保存協会 一九六〇年
 常石英明『日本刀の歴史（古刀編）』(株)金園社 二〇一六年
 常石英明『日本刀の歴史（新刀編）』(株)金園社 二〇一六年
 藤代興里『康継代々小論（下）』『刀剣美術』第三五二号 一九八六年
 本間順治『鑑刀日々抄』財団法人日本美術刀剣保存協会 一九七四年

本稿に掲載の画像は、全て中村慧氏（スペアタイムスタジオ）の撮像によるものである。

本稿執筆に際し、片山光一氏、高田純二氏、中村慧氏、玉置城二氏より資料の提供とご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

No.1 短刀 国広 江戸時代初期

〔寸法〕 刃長 28・8 cm、反り 0・1 cm、元幅 2・9 cm、

元重ね 7・4 mm

〔銘〕 国広

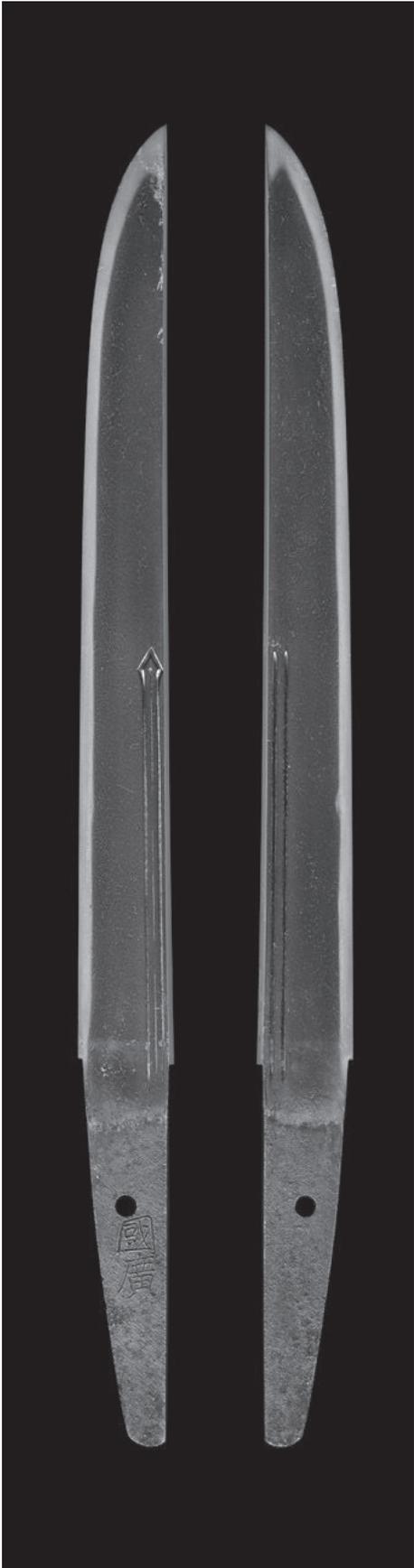
〔形状〕 平造、三ツ棟。先がわずかに反り、表に素剣、裏に護摩箆を彫る。

〔地鉄〕 よく詰んだ板目に杢を交じえて肌立ち、地景が細かに多く入る。区際から水影風の映りが立つ。

〔刃文〕 小沸出来の直刃を基調に、鉦元一寸ほどに表裏揃った沸崩れが見られる。

〔帽子〕 小丸に返る。

〔茎〕 角棟、栗尻、大筋違鑓、目釘孔1。



国広は、もとは九州日向国飫肥の伊東家の家臣であったが、同家没落後は諸国を遍歴しながら鍛刀技術を磨き、各地で作刀した。慶長四年以降は、京都一条堀川に定住し、多くのすぐれた弟子を育てた。

国広の作風は、末相州や末関風の京都定住以前のもの（天正打）と、主として相州伝の工を規範としたことが看取される定住後のもの（慶長打）に大別され、現存する短刀は後者に多い。

本作は、「堀川肌」と俗称される小板目ながら肌目が立った（ザングリとした）堀川一門に特徴的な地鉄や、同工の作に典型的な水影風の映りがみられる。大肌を交じえて直刃に仕立てた作柄は、山城の来派を意識したようにも思わせ、国広の作域の広さを示している点で資料的にも貴重である。

〔寸法〕 刃長 44・6 cm、反り 1・2 cm、元幅 3・2 cm、

元重ね 7・7 mm

〔銘〕 越後守藤原国儔

〔形状〕 鑄造、三ツ棟、大鋒で幅広、重ねが厚い。

〔地鉄〕 小板目が詰み、細かな地景が入り、地沸がつく。

〔刃文〕 広直刃を基調に浅い湾れに互の目が交じり、小足が入る。匂口締めまりごころに小沸つき、やや沈む。

〔帽子〕 直ぐに先小丸に返る。

〔茎〕 磨上、角棟、浅い栗尻、大筋違鑢、目釘孔1。拵に合わせて棟方が磨落とされたと思われる。



越後守国儔は、国広の甥と伝わり、堀川一門の代表的鍛冶である。また、作風や銘振りの共通点を根拠として、同門の後輩であった初代国貞や国助を直接指導していたことが指摘されている。国儔の年紀作は知られていないが、前述の先行研究に鑑みると、国広の晩年期から寛永頃までが活動の中心であったと考えられる。

国儔の作風として、鍛えがザングリとした堀川肌と、本作のようによく詰んだものがある。また、焼刃の匂口が締まって沈みがちであることや、銘字が下に行くにつれ大きくなる特徴があるが、本作もその典型といえる。姿は大鋒で身幅が広く、元先の幅差が少ない等、慶長新刀然とした体配である。鋺下に研師の銘として「菱田利幸研之」と刻まれている。

No.3 脇指 河内守藤原国助 江戸時代初期

〔寸法〕 刃長 36・4 cm、反り 0・8 cm、元幅 3・2 cm、

元重ね 7・5 mm

〔銘〕 河内守藤原国助

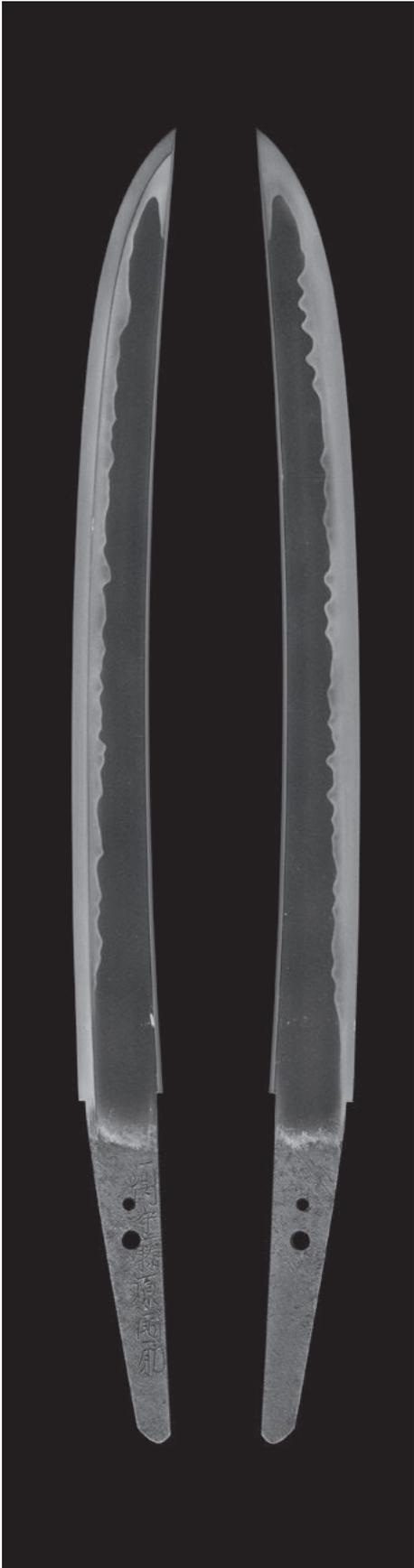
〔形状〕 片切刃、庵棟、身幅広く、重ねがやや厚い。

〔地鉄〕 板目が非常に細かく詰み、地沸が厚くつく。とくに指裏に棒映りが立つ。

〔刃文〕 指裏元は直に焼出す。小湾れに互の目・小互の目・丁子が交じり、小足が入り、小沸がよくつく。

〔帽子〕 小丸にかたく返る。

〔茎〕 生ぶ、角棟、刃上栗尻、大筋違鑢、目釘孔2。



河内守国助は、越後守国傳と同じく国広門下の刀工であり、慶長年間後期に国広に入門したとされるが、実際の師は国傳であったと推測されている。国広没後は国貞らと共に大坂へ移住して大坂新刀の基礎を築き、その後の大坂鍛冶の作風に大きな影響を及ぼした。

同名の刀工が後代に続くが、本作の銘にある「藤原」の二字は、初代国助の作あるいは二代国助の初期作に限られる。さらに、銘字がNo.2の国傳と同様に下へ行くにつれて大振りとなっていることから、初代国助のものとみるべきであろう。

堀川門とは異なり、国助の刃文には丁子が交じることが多い。匂が深く明るく、丁子ごころに連なった互の目の刃文は、二代国助の得意とした拳形丁子の端緒とも見ることができる。

No. 4 刀 正真

室町時代後期

〔寸法〕 刃長 71・1 cm、反り 1・9 cm、元幅 3・0 cm、

元重ね 6・4 mm

〔銘〕 正真

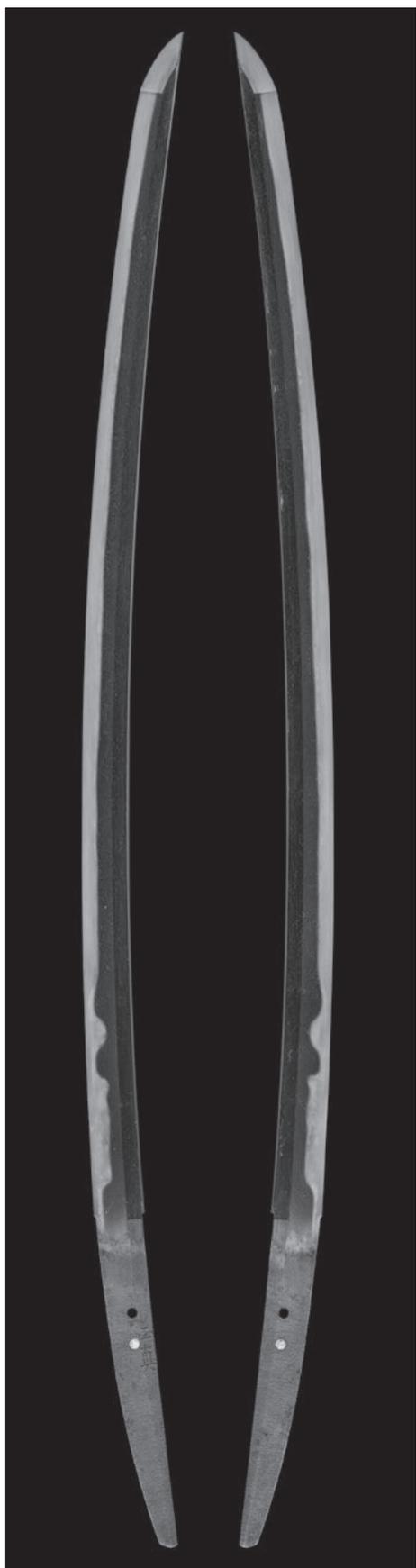
〔形状〕 鑄造、庵棟、京反りで中鋒伸びる。

〔地鉄〕 小板目に空が交じりよく詰み、地沸がよくつき、地景が入る。

〔刃文〕 元は表裏揃う箱がかった腰刃を焼き、上は幅広の直刃調に小乱れを交え、小足が入り、小沸がつく。

〔帽子〕 掃きかけて小丸に返る。

〔茎〕 およそ一寸程度区を送る。たなご腹、角棟、刃上栗尻、切鑢、目釘孔 2 中 1 埋。



正真は、伊勢千子派、三河文殊派、大和金房派に同名の刀工が存在し、世代や地域が近いことから、このうちの三者あるいは様々な組み合わせの二者を同一人物とする説が存在している。また、本多忠勝が所持した天下三名槍の一つ「蜻蛉切」の作者である正真についても諸説がある。

本作のように表裏がよく揃う刃取りはとりわけ千子一派に多くみられるものであり、箱がかった腰刃は同派の家芸とも言えるものである。茎は、千子派の祖である名工初代村正と同様の、腹の中程が広く張る「たなご腹」の特徴が表れており、千子正真の作とみるのが妥当と思われる。

No. 5 刀 康継 江戸時代初期

〔寸法〕 刃長 66・5 cm、反り 2・4 cm、元幅 3・1 cm、

元重ね 7・5 mm

〔銘〕 表（葵紋）康継以南蛮鉄

裏 於総州世喜宿作之

〔形状〕 鑄造、庵棟、中鋒で先反りごころ。

〔地鉄〕 板目肌に杓が交じりよく詰み、地景が入り、総じて鉄に黒みを帯びる。

〔刃文〕 直刃調に小のたれが交じり、刃縁は比較的冴え、小足と葉が入る。

〔帽子〕 大丸に返る。

〔茎〕 生ぶ、角棟、先は剣形、鑢目は勝手下がり、目釘孔1。



康継門は、江戸時代を通して越前と江戸に系を分立しながら代々同名を継ぎ、徳川家の御用鍛冶として繁栄した。初代は近江国下坂の出身で、越前藩主結城秀康の抱工となり、家康より康の字を賜って改名し、葵紋を切ることを許された。

本作の「総州世喜宿」とは、下総国関宿（千葉県野田市）のことである。世喜宿打は作例が少なく、年紀のある作は現存しない。佐藤貫一氏は、初代康継の次男康意が江戸三代の後見として制作したものである可能性を指摘し、さらに藤代興里氏は、康意が越前四代という立場で作刀したものであると論じている。南蛮鉄は、桃山時代から江戸時代初期にかけて輸入された鉄で、舶来品として珍重された。康継による南蛮鉄の使用例で古いものには、慶長一八年紀のものがある。